

---

# 妙ちゃんの宿題

高田龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妙ちゃんの宿題

### 【Nコード】

N0512E

### 【作者名】

高田龍

### 【あらすじ】

小学生の妙ちゃんが大好きなお祖父ちゃんに聞いた戦争。遠い昔、日本が世界を敵にまわし愚かな戦争にのめり込んでいった。夏休みの宿題の為に聞いた戦争の話は、妙ちゃんの心に平和を尊び、戦争を憎む人間として最も大切な種を植えてくれたようです。妙子、お祖父ちゃんが最初に言っておきたい事は、戦争は絶対にしてはいけないという事です…。これが、この物語のすべてです。

お祖父ちゃんの青春、それは戦争に翻弄された時代。それでも精一杯生き抜いた

妙ちゃんは、夏休みの宿題のことでおじいちゃんの所へ電話をしました。

宿題というのは、戦争を経験した人からその頃の話聞き、戦争について、平和について考え、作文にするというものです。

受話器を持ったままで妙ちゃんが笑っています。

きつとお祖父ちゃんが何か面白い事を言ったのでしよう。

開け放たれたりリビングの窓から、夏の朝特有の湿り気のある生暖かい風が吹き込んで来ます。

暑い、真夏の一日の始まりです。

郵便受けにお祖父ちゃんからの手紙が来ていたのを、プール帰りの妙ちゃんが見つけたのは三日後の事です。

お祖父ちゃんの手紙はこんな書き出しで始まっていました。

妙子、元気にしてますか。

お祖父ちゃんは今年で八十歳に成ります。

いつの間にか歳を取ってしまいました。

昔のことは大分忘れてしまいました、だから妙子の宿題の役に立つ

かどうか自信がありませんが、思い出した事から書いていきます。  
お祖父ちゃんが妙子に最初に言っておきたい事は、戦争は絶対に  
してはいけないという事です。

狭い部屋の中、勉強机の前に腰掛け、妙ちゃんはお祖父ちゃんから  
の手紙を読みました。  
長い、長い手紙でした。

そこには妙ちゃんの知らない沢山の悲しい出来事が書かれていま  
した。

やがて陽が西に傾き妙ちゃんの部屋にも夕陽が射し込んで、部屋の  
壁も天井も、  
妙ちゃんの顔も全てが夕陽の色に染められています。

その夕焼け色の中で妙ちゃんは、泳いだ疲れも手伝って、眠ってし  
まいました。

妙ちゃんが遅い昼寝の真っ最中、遠く離れた妙ちゃんの田舎では、  
西の山陰の向こう側に沈む夕陽を、

お祖父ちゃんは縁側に腰を下ろして眺めていました。

今から五十年以上昔、日本は世界を敵にまわして戦争をしていま  
した、そしてその時代がお祖父ちゃんの青春時代でもあったのです。

日本陸軍の優秀なパイロットとして中国大陆からインドネシア、ベ

トナム、ビルマ、タイとアジアの空を駆け巡っていたお祖父ちゃんは、危険な任務を次々と遂行し成功させました。

いつの間にかお祖父ちゃんに下される任務は、必ず生きて還らなくてはならないというものばかり、戦場から生きて還る事は、時には死んで還る事より難しい事なのです。平和な社会に生きる人達にとっては、理解出来ない事かも知れません。

お祖父ちゃんの青春はそんな時代の激しい流れに翻弄されながら過ぎて行きました。

真っ赤な夕焼け空に少しづつ夜の闇が溶け込んで、長い夏の日が終わろうとしていました。

お祖父ちゃんは少しずつ暗くなって行く空を眺めながら、あの頃を思い出しています。

あの日も丁度こんな夕焼けだった事をお祖父ちゃんは昨日の事のように憶えています。

それは南の国特有の暑さが去って心地良い風がジャングルから吹いてくる夕暮れ時の事でした。

お祖父ちゃんは新しい任務の為に、日本に戻る事になりました。

戦争は日本にとっていい状況ではありません。

前線基地と日本との間の空も海も、アメリカを中心とした連合軍に

制圧されていました。

圧倒的な軍事力の差は、強い精神力や大和魂ではどうする事も出来なかったのです。『マレーの虎』と呼ばれ、連合軍にその名を轟かせたある司令官は、軍事裁判に掛けられ死刑を宣告されましたが、処刑の直前に、敗因は何だと思うかとの質問に、たった一言『サイエンス』と言って死刑台に上って行ったそうです。

それ程日本と世界の科学力には開きが在りました。

そんな状況です、重要な任務を次々と成功させているお祖父ちゃんの事を連合軍は当然知っていました、そして敵の戦闘機のパイロット達はお祖父ちゃんの飛行機の尾翼に描かれた桜のマークのことも知っていたのです。

彼等は血眼になってそのマークを付けた飛行機を捜しました、何故ならお祖父ちゃんの飛行機を撃墜したパイロットには報奨金と国へ帰れる休暇が与えられたからでした。

お祖父ちゃんは、夜の闇に隠れて飛ぶしか方法が無かったのです。

その日も、夜に成るのを待つて出発する予定でした。発前に、負傷して野戦病院に入院している戦友を見舞っておこうと考えたお祖父ちゃんは、そこで怖ろしい光景を目にします。木造の粗末な建物の野戦病院の片隅に、テントを寄せ集めて作った遺体安置所が在りました。

そこには、未だ息がある瀕死の負傷兵達が棄てられたように横たわっていました。

両脚が根元から千切れた様に無くなっている兵隊の身体からは死臭が漂っています。

それだけでは有りません、その傷口にはビッシリと、蛆が湧いてい

るのです。

それも一人だけではないのです、顔半分、吹き飛ばされてしまった人間も居れば、腕の無い者、脚の無い者、折り重なるように蛆に塗れ、眼だけが異常に光り、辺りはいつまでもそこに居る事が出来ないくらいの死臭がたち込め、まるで地獄の様な、という表現がピッタリの惨たらしい光景でした。

それでも彼等は生きています。

あと少しだけ、彼等は生きていられる。

そんな彼等を遺体安置所に放り出した衛生兵や軍医の事を誰も咎める事は出来ません。

日本からの物資はなかなか送られては来ません、食料も衣類も何もかもが不足していました。

とりわけ医薬品は或る時期を境に全く送られて来なくなりました。

手術をするにも麻酔も無い、化膿止めも痛み止めも、消毒用のアルコールさえ手に入らないのです。

彼等に何をして上げられると言うのでしょうか。

軍医たちの気持ちは、痛いほどお祖父ちゃんには判っていました、見ない様にするしかないのです。

お祖父ちゃんは飛行場に戻り、出発の準備に忙しい仲間達に言いま

した。

『すまないが、この機体から外せる物は全部外してくれないか』

『？』

みんな、お祖父ちゃんの言っている事がよく判らず、キョトンとしています。

お祖父ちゃんはみんなが理解出来る様に順を追って話し出しました。

病院に放置されたままの兵隊達の事、ひとりとして五体満足な者は居ない事、傷の状態から云って、彼等が助かる事はまず無いという事、その彼等を自分は日本から遠く離れたこんな所で死なせたくない、せめて故郷の土に還してあげたい、という事を伝えました。

その話が終らないうちに、みんなは思い思いに工具を手に、取り外しの作業に取り掛かっていました。

機銃が外されました、弾薬が降ろされました、椅子や荷物も降ろされました。

これが無ければ飛行機が飛べないという物意外は全て機内から運び出されました。

常に死と背中合わせの危険な任務を共に果たして来た仲間達です、説明など要りません、気持ちを通じ合っていました。

心はひとつなのです。

お祖父ちゃんは、仲間達に心の中で手を合わせていました。

護衛の戦闘機も無く、武器を総て取り外した爆撃機が単独で飛ぶ事がどれだけ危険な事かは戦争を知らない人達でも想像はつく筈です。



それは自殺行為と言える事です。

やがて、野戦病院からトラックに乗せられ彼等はやって来ました。

お祖父ちゃんは彼等に向かって声を張り上げ、『お前達をこれから日本に連れて帰る、気を強く持って絶対に死ぬんじゃないぞ、必ず俺が日本に連れて行くから心配するな!』  
彼等の間から『うーっ』という呻き声が聞こえて来ました。

南十字星が夜空に輝きを増した頃、妙ちゃんのお祖父ちゃんが操縦する爆撃機は、一発の爆弾も積まず、一丁の機銃も無く、その代わりに瀕死の負傷兵を、すし詰めに乗せて日本に向かって飛び立ちました。

妙ちゃんのお祖父ちゃんは、まだ二十七歳の青年でした。

お爺ちゃんが妙ちゃんに伝えたい事…それは、平和よりも尊いものなど無いとい

月明かりだけを頼りに、妙ちゃんのお祖父ちゃんが操縦する爆撃機は蒼白い闇の中を、ひたすら日本へ向って飛び続けました。

眼下に広がる海は蒼白く、まるでスパンコールの様にキラキラと輝いていました。

どうやら敵機は居ないようです。

月と満天の星達に見守られながら、爆撃機はひたすら日本へ向って飛び続けました。

静かな夜です。

鈍いエンジン音が月夜の空と海に響き渡り束の間の平和がお祖父ちゃんと仲間達を包み込んで夜は静かに過ぎて行きました。

『ご飯よーッ』キッチンからお母さんが呼ぶ声で妙ちゃんは目を覚ましました。

すっかり夜になっていたのです。

階下のキッチンから、美味しそうな匂いがしてきます。

妙ちゃんは、お腹が減っている事に気が付きました。

『はあーい』元気よく返事をして、階段を降りていきます。

お父さんもいつもより早く帰って居ました。

楽しい三人の夕食の始まりです。

その夜、妙ちゃんは夢を見ました。

夢の中は、南の国の何処かの島でした。

満天の星空は、まるでダイヤモンドを黒いベルベットの上に撒き散らしたような、妙ちゃんが今迄に、見たことの無い、もう言葉では表現しようの無い美しさでした。

そして、水平線の近くに横たわるように、半分欠けた月が銀色に輝き、白い砂浜は月明かりに照らしたされ水の中まで輝いています。海から吹いてくる風は気持ち良く妙ちゃんの頬や髪を撫でてくれるのです。

誰かが砂浜をこちらに向って歩いて来ることに妙ちゃんは気が付きました。

若い男の人です。

誰なのでしょう。

前に何処かで逢ったような、懐かしい人のような、妙ちゃんは思い出そうとするのですが、思い出せません。

その若い男の人は、妙ちゃんのすぐ近くに来ました、そして『妙子、よく来たね、元気だったか？』

優しく尋ねてきます。

『お兄さんは、妙子のこと、知ってるの？』『もちろん、知ってるよ。妙子はね、後四十五年ほど経ってから私の孫として生まれて来るんだよ。』

妙ちゃんは不思議なことを言うお兄さんだと思いました。その言葉を夢の中では、なぜか信じる事が出来ました。『それじゃあお兄さん、妙子のお祖父ちゃんなの？』

お兄さんは、その質問には答えず、月が浮かんでいる辺りを眺めながら、『妙子、宿題は出来たか？』

と、聞いてきます。

妙ちゃんは、宿題はまだ出来上がってない事や、戦争の事も知らない事がいっぱい有ったし、お祖父ちゃんの手紙でいろんな事が判ったので、それを作文にまとめて発表するつもりで居ること等を話しました。そして、戦争が悪いという事は誰もが解っている筈なのに、なんでいつまでも戦争は無くならないのだろう。

世界の指導者達はみんな平和な社会を創らなくてはいけないって言うてるのに、戦争は終わらない。

今だって世界の何処かで戦争が行われている、何故なの、妙ちゃんはお兄さんのお祖父ちゃんに聞きました。

お兄さんのお祖父ちゃんは、妙ちゃんに背を向けたまま、呟くように話し始めました。『妙子、おまえの言うとおり、おかしい話だね、私もそう思うよ。』妙ちゃんは、もう一度訊ねます。

『お兄ちゃん、』

このお兄さんが自分のお祖父ちゃんなんだという事は、何となく理解出来たけど、こんな若いお兄さんの事をお祖父ちゃん、なんて呼べません。

『お兄ちゃんは、兵隊なんでしょ、昔の日本の軍隊は、命令は絶対だったんでしょ、だから、戦争が悪い事なんて言ったら大変だったでしょ。』

『それでも、戦争が悪い事だなんて、みんな解っていたよ。とくに軍隊の偉い人達は、よく解っていたさ、やったら負けるって…』

『じゃあなんで、戦争をしたの？』

『何故なんだろうねえ私にも解らないな。』

『妙子、私は思うんだけど、過去に戦争をどんな理由でやってしまったのか、それを探るよりも、未来に向って戦争を憎む心を、人間の中に植えて行く事が大事だと思うんだ、だから、未来を生きる妙子達が今から、戦争を憎む心を自分の中に育てて行ってほしいんだ。』

『ウン、妙子頑張る。』

妙ちゃんの返事を聞いたお祖父ちゃんは、とても嬉しそうでした。

青年の姿をしたお祖父ちゃんは、妙ちゃんの頭に手を置いて、『妙子、もういかなくてはならない、お父さんやお母さんの言う事をよく聞いて、勉強も頑張ってくれ』そういうと、月明かりに浮かび上がる砂浜を来た方向へ歩きだしました。

こぼれ落ちて来そうな星空と珊瑚礁。白い砂浜をお祖父ちゃんは戻って行きました。

お祖父ちゃんの姿が小さくなって、青い夜に溶けこんでしまいそうになった辺りで、妙ちゃんは、お祖父ちゃんを呼びました、精一杯、声を張り上げて、何度も呼びました。

一度だけお祖父ちゃんは振り向いてくれたようでしたが、すぐに青い夜の向こう側へ消えてしまいました。

妙ちゃんは泣きました。

お祖父ちゃんは死んでしまう訳でもないのに、何故か妙ちゃんの眼からは涙が後から後からこぼれ落ちて居ました。

妙ちゃんのお気に入りのオルゴールの目覚まし時計が鳴りだして、朝がやって来ました。

夢の中でいっぱい泣いた妙ちゃんの眼は、少し腫れぼったく為っていました。

今日は、宿題頑張れる気がする妙ちゃんでした。

何時間が過ぎたでしょうか。

惨たらしい姿の瀕死の負傷兵達を乗せた爆撃機は、日本の領海に近づいていました。妙ちゃんのお祖父ちゃんの操縦する爆撃機の機体は朝の訪れを報せる輝きに包まれています。

真つ暗な空が少しずつ、明るさを取り戻して来ると、そこには何処までも続く雲海が広がっていました。

その雲の海が東の方から朝焼けの色に染められて、紅の海原に変化していく様子は感動的な光景でした。

巨大な太陽が雲の海からついに姿を現すと、厳かな一日の始まりです。

何かもを、紅に染め上げ、そこに溶かした黄金を流したような、煌めきのセレモニーの始まりです。

そして、遙か前方に、雪を頂いた富士山が朝日をいっぱいに浴びて燃える様に雲海から姿を表しています。

『おいっ！みんな聞こえるか、日本だぞ！富士山が見えるぞ！起きろ、起きろっ！』

お祖父ちゃん機体を大きく傾けて、爆撃機の小さな窓から富士山が見える様にします。

負傷兵達に日本に帰って来れたことを知らせるためでした。『ウオ  
ーッ』

彼らは声に為らない声を発します。

小さな窓から、美しい富士山が見えます。

白雪を紅に染めて輝く富士山の姿は、ただただ美しく、言葉で表現することは出来ません。

折り重なるように狭い機内の床に横たわっていた負傷兵達の輝きを亡くした眼から涙が溢れ、土のようにひからびてしまった頬を、幾筋もの涙がつたい落ちています。

判るのです彼らにも、自分達が日本に帰って来れたことが、脚も無い、腕もない、あちこちに銃弾や爆弾の破片が入ったままの身体で、それでも彼らは帰って来たのです。

彼らの肉体は、とつくに腐って、死んでいます。

でも彼らの心はまだ生きていたのです。

彼らの心は、朝日を浴びて輝く富士山の姿を見てやすらぎました。戦争が始まってから、こんな気持ちになった事なんて有りませんでした。

遠い昔、彼らがまだ幼い子供の頃、お母さんの胸に抱かれて見上げた夏の朝の白い雲、あの時の幸せな気持ちを、父親と母親に挟まれるようにして手を曳かれながら出かけた縁日の賑わい。

幸せな時間、幸せな空間、それがどうしてこんなに成ってしまったのだろう。

やすらぎの中に心を漂わせながら、遠退く意識の片隅で彼らは思いました。

自分達がしてきた事が本当に日本の為に成ったのだろうか？

日本は勝てるのだろうか？

そして、最後に彼らひとりひとりが一番大切な人の顔を思い浮かべていました。ある歩兵は、故郷で小さな畑を耕しながら、自分の帰りを心待ちにしている母親を、ある整備兵は、ゆっくり話もした事の無い五歳年下の婚約者の顔を思い浮かべていました、また両手両脚を失ってしまった将校は、三カ月前に産まれたという、まだ見ぬ我が子を、せめて一度だけでもこの手に抱き上げたかったと思いました、でももう彼には赤ん坊を抱き上げる手が無いのです。

ただその子とこれから大変な苦労をしなくてはならない最愛の妻の幸せを祈るばかりです。

こうして負傷兵達は、静かに、眠るように生命の燈を消してゆきま

イノチ トモシビ



した。

静かに、眠るようにひとり、またひとりと…全員がこの爆撃機の搭乗員達に心からの感謝を残しつつ…。

『しっかりしろッ、死ぬな―ッ』

『生きる―ッ、あきらめるな―ッ』

搭乗員全員が口々に彼らに声を掛けます、でももう彼らには届きません。

お祖父ちゃんの眼にも、他の仲間達の眼からも涙が溢れ、それが無駄な事だと解ってはいても、皆は声を掛け続けました、いつまでもいつまでも。

操縦桿を操る若き日のお祖父ちゃんは考えました。

この戦争は、やっぱり間違っている、日本のためにもならない。後少しで、戦争は終わるだろう、それも日本が敗ける。

こんな戦争で生命を棄ててなんか居られない、俺は生き抜いて新しい日本の為に働く。

こんな戦争で死んでは、それこそ犬死にだ！よし、必ず生きて帰るぞ！

戦争が終わる八月迄、後、百日あまりの事でした。

大人になった妙ちゃんはその夏休みの宿題から知った平和の大切さの為に世界で

月日の流れは早いものです。

季節は変わって学校では二学期が始まりました。

今日はいよいよ、あの宿題を皆の前で発表する日です。三階の妙ちゃんの教室、三時間目の授業はもう始まって居ます。

木村君がお豆腐屋さんのお婆ちゃんから聞いた東京大空襲の話をして居ます。

火の海を逃げ回った話にみんな聞き入って居ます。

戦争の恐ろしさが伝わって来ます。

木村君の発表が終わるといよいよ、妙ちゃんの番です。

開放された教室の窓から、風が吹き込んでいます。

外はまだ夏の暑さが残っていて、教室の中はかなり温度も高く、座っていても汗ばむ程でした。『次は、妙ちゃん。』先生が呼びます。『はいッ』

妙ちゃんは、元気よく返事をして立ち上がりました。

書き上げた原稿用紙の束を広げて、背筋をピンと伸ばし、よく通る声で話し始めました。

『私は夏休みの間、田舎のお祖父ちゃんに電話をして戦争の事をいろいろ教えてもらいました、私のお祖父ちゃんは第二次世界大戦の時にパイロットとして戦争に参加して中国大陸や東南アジアを中心にして活躍した陸軍の軍人です。』

お祖父ちゃんは戦争時代の事を手紙にして送ってくれました。

その手紙に書いてあった事をまとめたので、これから読みます。『  
妙ちゃんはお祖父ちゃんの手紙に書いてあった悲惨な出来事や戦争の為にどれだけの人々が命を奪われたのか、その中には大勢の子供達が居たこと、そして妙ちゃんはその死んで行った子供達の中には大人になれていたなら日本や世界の為に活躍したかもしれない子が絶対に居たという事を訴えました。』

教室のみんなは、妙ちゃんの話に引き込まれていきます。

幾つかのエピソードが語られ、教室は静まり返っています。

『私のお祖父ちゃんに、今度の宿題の事を相談した時、一番最初に言われたことは、戦争は絶対にやってはいけないと云う事でした。』

戦争に仕方の無い理由などはないと思います。

戦争のために使うエネルギーを、戦争を止めるために使うなら、きっと世界を平和にする事が、出来ると思います。

世界中の国の人達は誰も戦争をしたいなんて思っていないと私は思います。

兵隊さん達だって、戦争がいい事だなんて、絶対に思っていないと思います。

それなのに、いつも世界の何処かで戦争が繰り返されています。

そして、弱い立場の人たちが一番最初に犠牲になります。

私はまだ小学生です、だから大人の社会の事は判らない事だけです。

大人は言います、子供には判らないんだって、難しい事は判らなくても、戦争が悪い事で平和が大切な事ぐらいは判ります。

私はこれから一生懸命勉強して、歴史や、政治や、世界の文化や、考え方の違いなどについて、知識を深め、世界を平和にする為に役に立てる人間に成ります。

お祖父ちゃんはこんな事も言いました。

何故戦争が起きたのかを知ることよりも、未来の人たちの心に戦争を憎む思いを植え付ける事が大事だ、私もその通りだって思います。

私が大人に成った頃、世界はきつと戦争の無い社会に成っています。

私達、未来の大人達にその責任があるのだと思います。』

妙ちゃんは、ひとつだけ嘘をつきました。

戦争を憎む思いを この話は、お祖父ちゃんの手紙の中には書いてありませんでした。

妙ちゃんが見た不思議な夢の中で出会った、若い頃のお祖父ちゃんが話した事でした。

みんなに、そんな話しても誰も信じてくれないだろうし、全部が嘘っぽく成っちゃうような気がしたのです、だから妙ちゃんは、お祖父ちゃんの手紙に書いてあった事にして、話しました。

でも妙ちゃんは、あの夢の中の若いお兄さんは、絶対にお祖父ちゃんに間違いないと思っているし、あの夢自体が、ただの夢ではなく何かよくは判らないけど、あの不思議な時間は間違いなく現実だったと確信していました。

妙ちゃんは、将来の目標や夢迄しっかり考えた、素晴らしい内容に仕上がった宿題の発表を終わりました。

教室の中は、クラスの仲間達の拍手の音が、いつまでも鳴り響いていました。

汗だくに成った妙ちゃんでしたが、心は晴れ晴れとして清々しい気分でした。

学校が終わったなら、仲良しとの寄り道も今日は辞めて、早く家に帰ろう、それで今日の事お祖父ちゃんに報告しなくては、と思った妙ちゃんでした。

お祖父ちゃん、喜んでくれるかな？

学校帰りの妙ちゃんの足取りはいつもよりだいぶ速いようです。

その日から十五年の年月が経ちました。

内乱の続く中東の或る国。

妙ちゃんは、立派な大人の女性に成長していました、都賀妙子<sup>ツガタエコ</sup>、妙ちゃんの姓名です。

敵国の空爆が有ったり、自爆テロが有ったりする治安の悪いその地域で妙ちゃんは、国連の職員として戦争の被害を調査したり、民間人の救済などの仕事に従事して居ました。

妙ちゃんは、お祖父ちゃんとのあの日の約束を守ったのです。

十五年前の夏休みの宿題を発表した日、妙ちゃんはクラスメイトに、自分が平和の為に役立つ仕事して生きていくことを誓いました。その日から妙ちゃんの人生には、妙ちゃんにしか見えない一本の線が春か遠い彼方まで続いていて、妙ちゃんはその見えない白い線をたどって歩き続け、気が付けば、戦乱の続く外国で約束通り、平和の

為の仕事をしています。

危険な目にあつた事も一度や二度では有りません。

その証拠に妙ちゃんの手足には、幾つもの傷跡が残っていますし、身体の中にも手榴弾の破片が取り出せてないままで残っています。恐怖に震えながら、爆撃の終わるのを物陰に隠れて待っていたことや、あまりにも惨たらしい戦場の光景を見て、やり場の無い怒りと悲しみに、瓦礫の中に立ち尽くして泣き続けた事も有りました。それでも、妙ちゃんは引き返すことはしませんでした。

お祖父ちゃんとの約束を守りたかった、いいえそれだけでは有りません。

世界を平和にする為に自分の一生を捧げることが最高の生き方だと思つたからです。

自分一人の存在がどんなに小さく、弱いのかは嫌というほど知っています、それでもその小さな砂粒の様な存在が、だんだん数を増やして行つたとき、間違いなく世界は変わる。

あきらめないで、その小さな一步を踏み出すことを。

あきらめないで、どんなに先が遠くても。

世界中に散らばっている同じ心の人達が、いつかその手と手を繋ぎ合つて歩き始めるその時まで、あきらめるな、あきらめるな、諦める事それは敗北、妙ちゃんは自分に、そう言い聞かせてここ迄来たのです。

砂漠の国の強い陽射しに、眼が眩みそうに成つた妙ちゃんは、見上げる空の輝きの中から古い型の飛行機が姿を現したのに気が付きま

した。

『お祖父ちゃん…』 何故だか、妙ちゃんはその旧式の双発機がお祖父ちゃんの操縦する飛行機に思えたのです。

そんなこと有る筈もないことなのに、そう思ったのです。

『お祖父ちゃん…また負傷兵の人達を運んでるの？』

妙ちゃんは心の中でお祖父ちゃんに話し掛けました。

その時です、妙ちゃんの中でお祖父ちゃんの声が聞こえました、  
『妙子、立派に宿題をやり遂げたね、道は険しくても、どんなに遠くても、歩みを止めなければ、必ず目的地に着ける。もう少し、もう少し、妙子、もう少しだよ。』

妙ちゃんは、あの夢の中の砂浜時のように答えました。

『うん妙子、頑張るね』

気が付くと、晴れ渡る空の何処にも、あの飛行機の姿はなく、妙ちゃんの目の前には、焼け爛れた戦車が一輛、地面にめり込むように放置されています。

そして、その戦車の上に何人もの子供達が、賑やかに遊んで居ます。

子供達の笑顔が悲惨な出来事を忘れさせくれます。

妙ちゃんは、世界中のこんな子供達が、安心して遊べる社会を造り上げなくてはいけないと、また決意を新たにしました。

そうですね、合い言葉は

…もう少し。



大人になった妙ちゃんはその夏休みの宿題から知った平和の大切さの為に世界で読了ありがとうございます。今も私達の住む世界は決して平和だとは言えない状況です。戦争だけではなく環境破壊や新種のウイルス等、地球的規模の危機が取り巻いています。こんな世界を変えるのは科学も政治も重要ですが、一人一人の人間の心に平和に対しての強い気持ちを育てることではないでしょうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0512e/>

---

妙ちゃんの宿題

2010年10月10日11時12分発行